



「つながり」を探して ④

貧困を背負って生きる 子どもたち～スクールソーシ ヤルワーカーとの連携～

滋賀県教育委員会スクールソーシャルワーカー
幸重忠孝

学校の教職員の研修などで活用している物語「貧困を背負って生きる子どもたち」を通して、スクールソーシャルワーカーとの連携の必要性を考えます。

「学校に行っている場合じゃないや」

今年1月から施行された「子どもの貧困対策法」について、学校の教職員のみなさんはどれだけ知っているのでしょうか。生徒指導に関わる先生方は感覚的に家庭の貧困が子どもが学校生活にさまざまな影響を与えていることを理解していると思いますが、学級担任の中には子どもの貧困の深刻さを実感していない方、学校での生徒指導の課題と子どもの貧困の関連に気がついていない方も多いなどスクールソーシャルワーカーとして仕事をす



責任のない問題を家庭に抱えて学校に通ってくる子どもたち。そしてそのことが根っこにあることで、今度はクラスでうまく行かずにいじめ（被害者の場合もあれば加害者のことでもあります）などを受けているケースのエピソードを混ぜ合わせ、小学6年生の智の視点で作品を仕上げました。

智の担任の先生は、熱血型の若手教員で、子どもや保護者からの信頼も厚く、先輩や同僚教員からも一目置かれています。みなさんの学校にも、この担任の先生のような方がたくさんいると思います。担任の指導力でつくり上げた団結力のある素晴らしいクラスの中で、一人輪を乱す智のことを、担任の先生を慕う一部の子どもたちがネットで悪口をつぶやくところから物語が始まります。そしてあ

る中で感じていきます。

そこで見ようとしなないと見えない「子どもの貧困」を理解してもらうため、子どもの貧困課題をテーマにした脚本をつくり、動画投稿サイト YouTube で公開した「貧困を背負って生きる子どもたち 仁の物語」は、公開から1年半が過ぎ10万再生を超える反響がありました。この物語の主人公である中学3年生の仁は、母と小学6年生の弟の三人暮らし。母は精神疾患で働くことも家事も満足にできず、生活保護を受給して暮らしています。仁が不器用に家事や弟の世話をする中で何とかこの家はまわっています。もちろん仁は不登校です。そんな彼に、学校へ行きなさい、学校へ来いよと声をかける母や先生たちや社会に、彼は心の中でつぶやきます。学校に行っていないやないや。学校に行っていない場合じゃないや。

教員研修などで「仁の物語」を視聴した先生方から、仁のような生徒のことが脳裏に浮かんで涙が止まらなかつたという感想をたくさんいただきます。ところがこの「仁の物語」では、孤立した仁を直接支え、仁が次のステ

る日、家庭での事故で智が入院したことをきっかけに担任がいじめのを知るようになるのです。はじめての6年生の担任で、ここまで最高のクラスをつくり上げてきた担任の先生のショックは大きく、同時に陰で陰湿ないじめをしていた加害者たちを絶対に許せず。これからは被害者の智を自分が守る！と熱い決意をして入院している智のもとを訪ね、自分がいじめに気がつかなかつたことを詫び、いじめをしていたクラスみんなに謝らせ、これからはいじめがないクラスをつくることを智に約束します。そんな担任の先生の言葉を黙って聞いていた彼は、心の中でつぶやきます。

謝ればいままでのことは全て許されるのか。やられたことは謝っても消えないのに

物語の中に隠されたスクール ソーシャルワーカーの本当の意味

「いじめは絶対に許さない」という姿勢は、学校が教育機関である以上、大事な考えです。でもきちんといじめへのアセスメント（分析）がないまま「ただ許さない」の姿勢だけでいじめの生徒指導に入ってしまった結果、

ップを踏み出すきっかけを与えたのは社会教育の一つである地域のボランティアが運営する学習支援や夜の居場所でした。ということもあり、学校の教職員が子どもの貧困課題に何ができるだろうかというヒントを、この「仁の物語」では伝えることができずにいました。そこで新たに続編として小学6年生の弟、智を主人公にした「智の物語」をスクールソーシャルワーカーの仲間たちの協力のもとに制作することになりました。

謝ればいままでのことは 全て許されるのか？

ちょうど「智の物語」を制作していた昨年度、私が所属する滋賀県教育委員会では、みなさんもご存じの津中2いじめ自殺事件を受け、スクールソーシャルワーカーとして県内の多くのいじめ事案に関わらせてもらいました。さらに当時理事長をしていた地域のNPOで行っていた「仁の物語」に登場する学習支援や夜の居場所に来る子どもたちの多くが、貧困を背負うことで不登校や学校でいじめ体験を受けていました。

貧困や家族からの虐待など、子ども本人にいじめ現象はなくても、結局その後、加害者の児童生徒、またその保護者による指導への不信からくる学級崩壊、そして教員が被害者を過度に守り、いじめは受けなくなるものの被害者は教室でひとりぼっちになるというケースをたくさん見てきました。

優先すべきことは「いじめがないこと」ではなく「全ての子どもが学校で安全に安心して過ごすこと」のはずなのに、現象に追われた生徒指導は、時に一人ひとりの子どもたちの思いを置き去りに大人だけで進んでしまうことがあります。いじめが発覚した後、「智の物語」ではどのようなように先生たちが支援を進めていったのか、何を大事にしていたのか、ぜひ学校現場で子どもたちと向き合う多くの先生たちにこの作品を視聴していただきたいと願っています。



ゆきしげ・ただたか
1973年生まれ。岡山県出身。社会福祉士。児童養護施設職員、大学教員を経て、現職に。モットーは「支援がなければつくりたい」。今回紹介した作品は、幸重社会福祉士事務所のホームページに公開。